

回顧録

起伏に富んだ時代を生きて

間場寿一[†]

『評論・社会科学』が創刊されてから本号で40年余りが経過した。振り返って時代の変化の様相を思い浮かべると、時の経つ早さに感じ入るとともに、創刊号の頃の情景が蘇ってくる。本誌が企画された事情については、当時、産業関係学専攻教授の伊藤規矩治さんが「『評論・社会科学』創刊にあたって」と題した一文で触れておられるが、その事情を時代の背景と重ねて思い返すと、端的に言って、当時の大学を取り巻く状況が浮かび上がってくる。1968年頃から70年にかけて全国の多くの大学を席卷した紛争がそれだ。とりわけ、68年11月の東大・日大闘争勝利全国学生総決起集会をピークに全共闘（全学共闘会議）運動が燎原の火のように各大学に燃え広がり、紛争は次第に過激さを増していった。

同志社大学でも学費値上げ反対やカリキュラム作成への学生参加を求めて運動が拡大し、69年度前期に学生自治会によって校舎の一部が封鎖され、動きが突鋭化していった。団交と称する会合も行われた。私も学生の主張に耳を傾けようと出席したし、学生と話し合うよう努めたつもりである。当初の段階では、学生のイニシアティブで議論が交わされていたが、騒然とした雰囲気にも包まれた団交のある場面で、研究の意義について問われた教員が、自らの学問に対する姿勢を何ら揺らぐことなく語りかけた態度に共鳴したことを憶えている。集まっていた学生の多くも次第にその話に聞き入り、一部の過激派学生が思わぬ成りに行きに戸惑い、団交を打ち切るようなこともあった。

しかし、バリケード封鎖が次第に拡大し、前期試験がレポート試験に切り替えられる事態となった。紛争が始まった頃、社会学科の研究室があった弘風館では、教室は閑散としていたが比較的出入りできたので、ゼミの有志の学生と読書会を開いて勉強したのが懐かしく思い出される。取り上げた文献の1つに神島二郎著『近代日本の精神構造』があった。「いかなる政治権力といえども、なんらかの意味において被支配者による下からの支持なしには、成立するものでもなければ、維持されるものでもない。」本書の冒頭に記されたこの一文が、日本ファシズムを解明する神島の基本視角を示しているの

[†]1965～1973 年在職

だが、その方法は、柳田民俗学の研究成果と政治思想史の丸山理論を批判的に摂取し、その知見にもとづいて近代化の過程を逆照射し、日本ファシズムの特質が、「ごくありふれた普通の日本人の意識」に根ざした「心意現象」であることを明らかにするアプローチであった。近代主義に対する内在的な批判に貫かれた斬新な発想と研究の意義を学生たちと議論したものだ。

ところが、69年の秋頃から今出川キャンパスが全面的に封鎖され、学生との対話の場も失われていった。その情勢は全国的な紛争の動きと連動していて、学生にも自力で解決することが難しい要素を含んでいた。そうした中でやりきれない事態が起こった。ゼミの学生が東京でセクトの内ゲバに巻き込まれ尊い命を失ったのだ。その知らせを聞いて私はすぐ一人で、彼の故郷である伊豆の静かな港町に弔問に出かけた。重い気持ちであった。お会いした母親が「西（＝京都）でなくて、東（＝東京）であるのが何とも納得できません」と咳くように話されたことを鮮明に記憶している。

バリケード封鎖が解除された後、大学がすぐに落ち着きを取り戻したのではない。70年度の新学期が始まった頃も、今出川キャンパスの正門や西門に教職員が交代で警備する「日直」が実施されるといった非日常の状況がしばらく続いた。社会学科のスタッフの間で、紛争の事態は絶えず真剣な問題として話題になっていた。その中で、研究成果を積極的に発信するメディアのあり方も話題として浮上してきたように思う。個々の研究室の中で、あるいは専攻ごとに、そして社会学科の会議の議題として議論され、その動きが『評論・社会科学』の発行に結実していったのではないかと思う。

学生の思い出についても一つ、時期は定かでないが今も憶えている出来事がある。それは年度末に行われる通年試験に関係したことである。ある学生が私のレポート試験で合格点を得られなかった。彼は自分が置かれている事情を話しに研究室にやってきた。4回生で就職が内定しているが、卒業できなければ諦めるしかないとのことだった。欠点にした理由を説明すると、落胆した表情であったが静かに聞き入り、やがて納得して留年を決意した。ところが、新学期になって程なくやってきて、もう一度私の授業を受けたいといってきたのだ。それから1年経って提出した学年末のレポートはよく思考をめぐらした成果であり、しかも、1年前に内定取り消しになった公社に再度内定したとのことであった。ささやかな話のようであるが、本人にとって深刻な問題であったに違いない。それだけに、彼の行動はさわやかな感動を与えるものであったし、今も忘れがたい思い出として蘇ってくる。

学生と出かけた宇治川河畔のハイキングの楽しかった一日や卒業生追い出しコンパの賑やかさ、ゼミでまるで講義するかのように時間一杯報告する熱心な学生の姿が今も目に浮かぶ。思い出は尽きないが、研究者として業績をあげ、斯学で注目されている卒業生の活動も頼もしいかぎりである。

私の前任校は熊本大学法文学部であるが、当時は旧制五高（第五高等学校）の伝統と雰囲気がお濃厚に残っていた。いま国の重要文化財に指定されている五高記念館に教室や研究室があった。60年代初めに赴任したとき正式に社会学専攻はまだなく、学内措置で哲学科倫理学専攻 B と称して学生を受け入れていた。着任早々、正式設置の任務の一部を担うことになったのだが、社会学の教員は私一人だったので、それなりに忙しい思いをした。3・4回生あわせて9人の学生だったが、汗水たらして研究室の整備にあたってくれた。昨年秋、その最初の卒業生から古希を迎えたとの挨拶状が送られてきて驚いた。思えば20代後半に勤めた大学の卒業生だから不思議でない。今も元気に教職に就いているとの便りは嬉しいかぎりだ。

社会学専攻の正式設置を見届けて同志社大学に移ったのが1965年4月で、経済の高度成長のただ中であつた。着任したときの印象は、伝統も雰囲気も設備も前任校とはかなり異なるものだった。73年4月に大阪大学にかわるまで8年の間、スタッフの皆さんと快適に過ごさせていただいた。その時の卒業生はみな還暦を越えた歳になっているし、定年を迎えたという知らせが舞い込んでくることもある。在職期間は決して長くなかったけれど、30代という〈働き盛り〉の時期を起伏に富んだ時代の中で過ごせたのは貴重な経験であつたし、その後の研究生生活に少なからず影響を持ち続けてきたように思う。